

玉川上水の奇跡 「ひとくい川」

第五話

府中用水取り入れ口（国立市）

根川の多摩川との合流点、国立市青柳に府中用水取り入れ口（ゲート）がある（写真9）。ここから府中用水は始まり、多摩川沿線の水田地帯を潤し、府中の是政、その末端は調布まで及んでいる。用水開削の時期については、明らかではないが、1722年頃と見なされている。

この府中用水の多摩川からの取水方法には次のような見方がある。その①は多摩川からの取水は、府中用水ゲートから4～5km、もしくは、さらに上流の拝島あたりではないかと言われている。取水後、水路（用水路）は古多摩川の河岸段丘上を流れ、これを旧河床の名残である残堀川につなぎ、さらに根川に接続される。根川で青柳まで運ばれた用水は府中用水ゲートに至る。その②は府中用水ゲートから800m上流の多摩川日野橋あたりから取水され、多摩川本流に沿って導水され、ゲートに至る。以上の2説、いずれも納得できるが、現地の説明板に見られるように、府中用水は玉川兄弟による玉川上水計画との関係が深く、その失敗作の水路を利用したのものであるとも考えられている（写真8）。この府中への上水計画の失敗で不要になった根川を、その後、府中用水に利用したというのが理解しやすいと思われる。



写真8

府中用水取り入れ口の説明。現地表示板

注目すべきは、上説①で示したように、多摩川拝島あたりから取水された水は河に並行して流れ、残堀川を通過して根川に接続されていることであり、この水路は次の第六話に示す多摩川と導水路の水面差を高めるような水路工になっている。また、この工法が川越藩の安松金右衛門によって完成されたとされる玉川上水の「川縁通り堤築立て工法」と同じであり、その原型が、ここに見られると言うことである。当時としては画期的な工法で、まさに、今からみれば、誰にも可能なことでも最初に敢えてすることの難しさを言う「コロンブスの卵」のようなものであろう。

根川は河岸段丘に乗って、ローム台地上にある甲州街道に接近している。ここから標高を落とし府中用水門に至り、その余水は多摩川にもどされる。現在の残堀川の上流は台地へ北上し、昭和記念公園台地方面（旧立川飛行場）につながっているから、全体が古多摩川ではないが、多摩川河川沿いには多くの水路があるので、これらから昔の残堀川源流（旧残堀川）を辿ることが出来る（写真9）。



写真9 残堀川は古多摩川の名残と言われている、河岸段丘を流れている。残堀川の標高(74)から根川が始まる。()は標高(m)を示す。

現在の残堀川は標高(74)地点で根川へ分水した後、多摩川と合流して終る。現地説明板に示されるように、この残堀川を含め、根川が失敗した玉川上水の一部であるとすれば、国立市青柳あたり根川(69.8)地点で台地に引込めば、ここから順調に緩やかな下り勾配で甲州街道、府中まで達することができる。さらに甲州街道に沿って江戸まで延長もできそうに見える。ところが、甲州街道には、写真2(第二話)で示したように野川、調布、深大寺、三鷹・仙川などの低地群(最低標高30m)がある。これら障害となって四谷大木戸(標高34m)まで水路を延長することが出来ない。

当時の測量技術では正確な標高が得られず、甲州街道の低地を、そのまま掘り進めれば新宿四谷に行けると判断したのであろうか。ただし、低地の水路敷設には難問が生ずる。

上り坂では水路は台地を深い切り通しで進むか、あるいは架橋式、あるいは盛り土にするかなど、施工技術的に様々な難しさがあるが、このことを克服できると考えていたのかも知れない。

そのころ玉川兄弟は玉川上水の様々な難問に直面して困り果てていたというから、この頃に、おそらく川越藩の数理と測量技術に長けた、安松からの教えを受けたに違いない。玉川兄弟は、安松から観測技術についても多くの新知見を得たはずだ。玉川兄弟は低地を再測量をして、上記、野川あたりの低地群が思った以上に難所であることに気づき、これがこの計画断念の最大の理由になったのではなかろうかと、推論する。安松から受けた新知識は以後の玉川上水計画最大の難関、「ひとくい川」計画に役だったことであろう。
